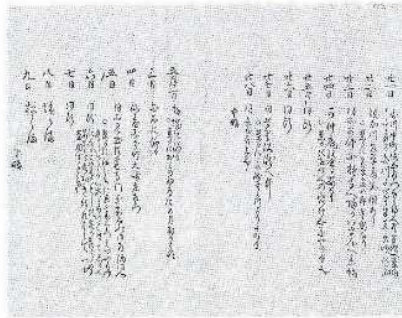
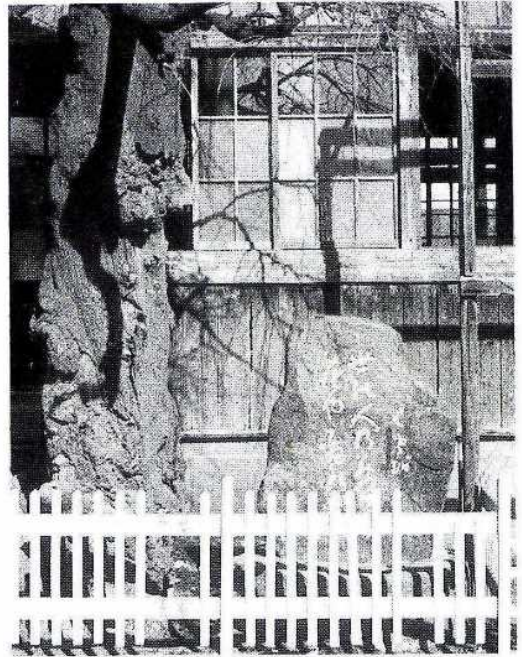




雨考肖像画



青蔭集の一部



八幡社境内(現市役所前)に雨考らが建立した「軒の栗」句碑。現在は可伸庵跡に

# 須賀川の人物史

(21)

青蔭集を編集した石井雨考(一七四九〜一八二七)

## 亜欧堂田善が挿絵を描く

江戸俳諧の希観本として出版界や俳文学会から注目されている「青蔭集」は、百七十五年前の文化十一年(一八一四)、諏訪町の酒造業で俳人の夜話亭雨考が編集、発行した俳諧書である。

て西洋の銅版といふものに眞景をうつさしめ我辺境に是らの風色ある事をする人稀なればよき序とおもひて世の人に披露す。

だ何にも載せられていなかった曾良の随行日記の一部で、白河から松島までの収録である。曾良の随行日記は、芭蕉研究家山本六丁子が発見し、昭和十八年に出版されたが、それまでは、貴重な資料であった。

雨考は、寛延二年(一七四九)、渡辺恒右衛門の子として生まれ、後に、父と共に石井家に入ったといわれている。本名を久右衛門といい、子供

この本が各方面から注目されている要因は、挿絵と曾良の「おくのほそ道随行日記」の収録にある。当時の挿絵は、一般には著名で伝統的な各派の画家か、浮世絵画家に揮毫を依頼したのであったが、雨考は隣家の亜欧堂田善(広報一月号参照)に銅版画で「陸奥国石川郡大隈滝芭蕉翁碑之図」の制作を頼み、彼は同書に次のように記している。

彼は、この句碑の建立にあやかり、芭蕉崇敬の証として、青蔭集を編集したのではないだろうか。また挿絵のほかに、注目されていたのは、当時ま

それは俳壇における彼女の地位が確立されつつあることを認めたからであろう。

## 小林一茶も句を寄せる

全国の俳人からも多くの俳句が寄せられている。主な俳人としては、大伴大江丸、井上土朗、金令道彦、小林一茶、松窓乙二、建部巢兆などである。跋文は出版元となった、

のころから、俳句を徳善院の僧二階堂桃祖に学び、二十三歳の時、諏訪の森の傍らに庵を建て、俳人との交遊の場とした。

この庵に桃祖は「夜話亭」と名付けた。また文化七年夏、成美は、夜話亭の周囲の環境

と雨考の人柄から、庵の地を「秀海」として、記念に「秀海の記」を揮毫して贈った。雨考は、俳諧活動の一つとして市内の俳人たちと木版で絵入りの「俳句刷り」を発行した。挿絵は田善の描いたものが現在四点確認されている。

が、特に文化十年に出したものは、十九・五×百四センチの特大判で、俳句刷りとしては、あまり類がないものである。田善の「蛭売りの図」に道彦、多代女、桐宇、旧台、雨考など十二人の俳句を入れ、終わりに「みちのく須賀川連」

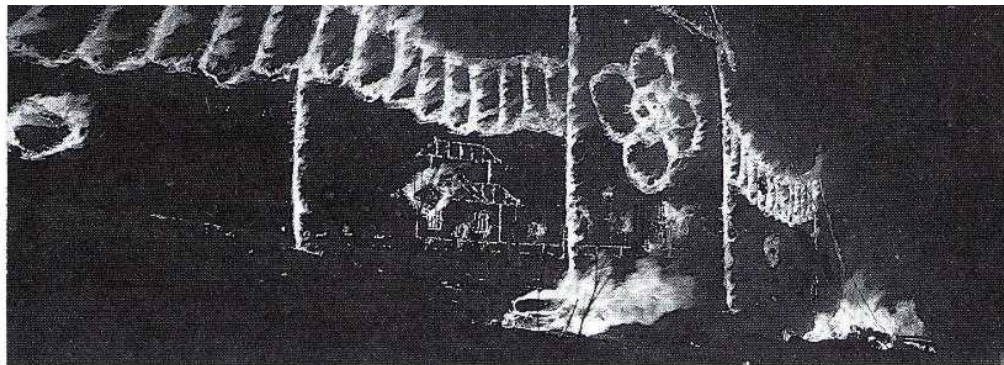
(旧矢部楳郎コレクション現市立博物館蔵)とある。

田善の画に雨考が俳句を賛した幅物も数点残されているが、これは二人が年齢も一歳違いで、仲の良かった友達であり、後に、両家の子供たちが縁組みをしたためでもあると思われる。

## 三度移転した「軒の栗」句碑

雨考は、晩年の文政八年、芭蕉の俳句「世の人のみつけぬ花や軒の栗」の句碑をゆかりの地、八幡社境内の枝垂れ桜の許(現市役所前駐車場)に竹馬、英之、阿堂と共に建立した。しかし、この句碑は三度場所を変えられた数奇な運命をたどり、現在はNTT裏の可伸庵跡に建てられている。

このように家業の傍ら、芭蕉を尊敬し、地方俳壇の指導者として一生を送った雨考は、文政十年七月六日、「わが命どの朝顔の露ならむ」の辞世の句を残し七十八歳の生涯を終えた。



政略の犠牲になった姫

岩瀬御台

(一五八五〜一六三九)

ムジナ狩りに  
こと寄せる

松明あかしは、この戦いで戦死した多くの人々の霊を弔

うため、新しい領主の目をはばかり、ムジナ狩りにこと寄せて、続けられてきた火祭りです。

昔は旧暦の十月十日でしたが、現在は新暦の十一月の第二土曜日に五老山で行われて

います。この五老山は、天正九年、三春城主田村清顕方と須賀川城主二階堂盛義の老臣五人が和睦の交渉をしたことから、五老山と呼ばれるようになった所です。

三千代姫悲話

また、松明あかしに行われる姫行列には、悲しい物語が秘められています。

会津黒川城主の  
二女として生まれる

盛隆は須賀川城主、二階堂盛義の嫡子であったが、永禄九年、芦名盛氏との戦いで敗れ、黒川城の人質となった。盛氏は、嫡子盛興の妻に伊達晴宗の四女を迎えた。しかし、病弱であった盛興が亡くなったので、盛隆を芦名の跡つぎにして、盛興の後室と結婚させ、一男二女を儲けた。彼女は大乗院の妹で、盛隆の叔母である。

る。

盛隆の後見としてにらみを利かしていた盛氏が亡くなると、盛隆は、男色と酒に溺れ、天正十二年(一五八四)十月六日、三十三歳のとき家臣の大庭三左衛門に斬殺された。

この年、政宗は十八歳で伊達家を相続、仙道筋を我が手の中に入れるべく企てていた。

年代が前後するが、天正九年八月二十六日、盛義が病没。後室の大乗院は尼になり、須賀川城主となった。また、跡つぎに孫娘である盛隆の二女を養女とした。

その後、政宗は政略結婚によって親戚同士となった一族に、妥協のない戦いを挑み、須賀川城も落城した。このとき落ちのびて行く身

鎌倉時代の文官であった須賀川領主二階堂為氏は、一族の治部大輔を代官として、岩瀬地方を治めさせていました。しかし、治部は大変横暴なやり方をしていました。このため、文安元年(一四四四)、為氏は須賀川城に入ろうとしたが、治部は入城を拒み、娘の三千代姫を為氏に嫁がせ、三年後に城を明け渡すことを約束したのでした。為氏は、和田城主須田美濃守の好意で、和田大仏南の岩間城で待ちました。ところが三年たっても城を明け渡さないで、涙を飲んで三千代姫を離縁し、送り返して、治部を討ち入城しようとなりました。三千代姫を和田から送り返す途中の暮谷沢で、両軍が激しい戦いとなり、三千代姫は進退窮まらなれ、人間はば岩間の下の涙橋流さでいとま暮谷沢」と、辞世の歌を詠んで自害しました。



## 須賀川史談会が岩瀬御台の墓参

須賀川史談会会員は秋田を訪問し、天仙寺にある岩瀬御台、須田美濃守、須賀川衆の墓参をしました。(昭和63年10月4、5日)

の大乗院は、一人の幼い姫を連れて岩瀬仁井田、福島杉の目、磐城平から常陸佐竹家に身を寄せた。この姫が、佐竹義宜の奥方となった「岩瀬御

台」である。慶長七年(一六〇二)、佐竹家は、水戸から秋田に国替えになり、新しく築かれた久保田城(秋田市)に入城して、

間もなく彼女は、十八歳の若さで離縁された。

彼女は、横手城下の屋敷で余世を送ったが、義宣からの二百石の化粧料と数々の贈り物に愛を感じ、自らの立場をわきまえながら、義宣没後の寛永十六年(一六三九)八月八日、破乱にとんだ生涯を閉じた。五十四歳であった。

二代藩主義隆も彼女へのいたわりを忘れることなく、葬儀は藩によって執り行われた。なぜ離別した女にそれだけのことをしなければならなかったのか、それは佐竹氏が水戸五十四万石から秋田二十万石に減封、国替えとなったとき、新藩創設の犠牲となった彼女への藩として最大の榮譽をもつての報いといわれている。菩提寺の横手市天仙寺にあ

る位牌のホゾの部分に「天英様(義宣)の御台なり、わけこれあり天仙寺において御葬式あいますものなり」と小さな文字で記されている。「わけこれあり」は、彼女が背負って来た二階堂、芦名、佐竹、伊達の血のためではなかったのか、また、義宣は政宗の背後に見える家康の大きな影におびえていたためであるという。(永山祐三)

いかに戦国の世とはいえ、夫と父の板ばさみの悲しい物語に、昭和三十年、竹内憲治さんによって暮谷沢の涙橋に碑が建立されました。また、昭和六十三年四月には、三千代姫堂建立実行委員会が三千代姫像を安置するお堂を建立しました。

この編集にあたっては、村越幸司須賀川史談会長にお話を伺いました。

四百年前の天正十七年（一五八九）十月二十六日、仙道筋と会津街道、岩城街道が交差する交通の要衝にあった須賀川城は、会津一円を我が手中に入れた米沢城主伊達政宗に滅ぼされた。このとき、須賀川城主は二階堂盛義の後室「大乘院」、四十七歳。また、政宗は、独眼竜の異名をとる奥州の暴れ者二十三歳であった。この攻防戦は、伯母と甥の「骨肉相食む」戦いで、大乘院は戦国時代の女城主として、今に語り継がれている女傑である。

# 須賀川の人物史

須賀川最後の城主

大乘院

(一五四二—一六〇三)

23

## 伊達政宗の伯母

大乘院は、天文十一年（一五四二）のころ、伊達郡西山城（国史跡、桑折町）に居城していた伊達家十五代晴宗の長

女として生まれた。のち、彼女は従兄の二階堂家十八代盛義（盛義の母は晴宗の妹）に嫁いだ。彼女は盛義との間に盛隆を生んだが、盛義は永禄九年（一五六六）、会津黒川城（若松城）芦名盛氏と争いを起こして敗れ、嫡子盛隆十六歳が人質として黒川城にと

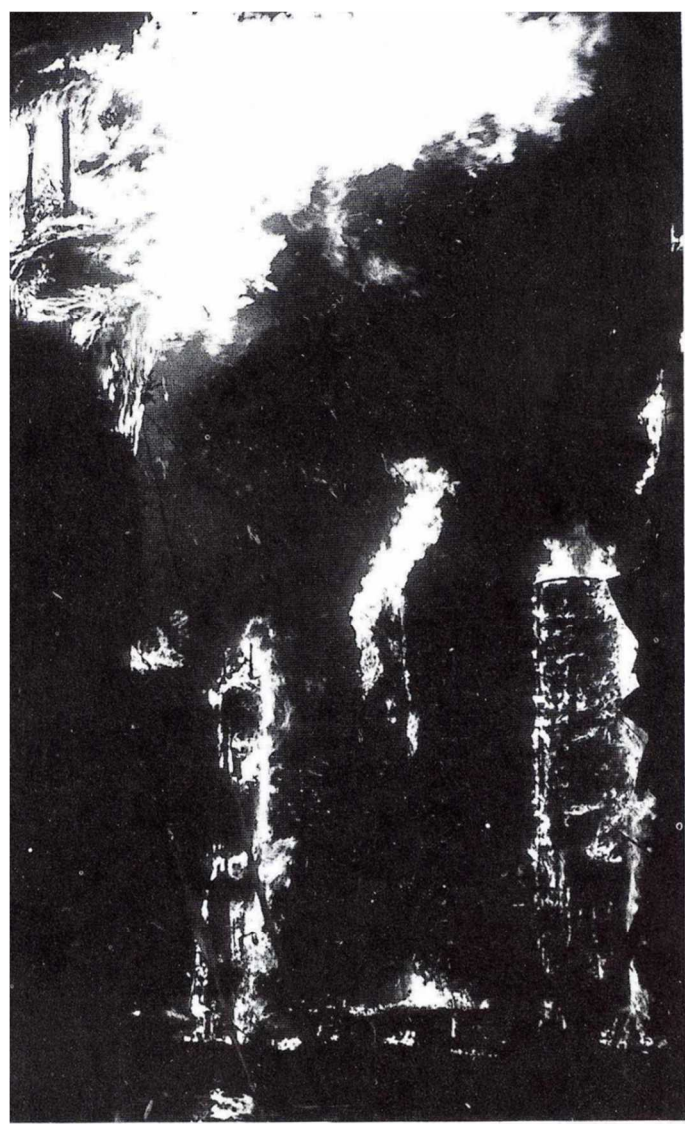
られた。

その後、盛氏が隠居して嫡子盛興が家督を継いたが、弱のため三十九歳で没した。ここで盛氏は人質の盛隆二十五歳を跡継ぎにして黒川城主とした。

## 盛義の没後

## 女城主に

また、盛興の後室（晴宗四女、大乘院の妹）二十四歳を盛隆の妻にして、三女を儲けたが、夫婦仲がうまくゆかず、盛隆は、男色と酒に溺れるようになった。このころ、須賀川城主二階堂盛義が病没。後室は尼になり、城主として、領内の安定に努めた。家臣は、その威に服したという。彼女は盛隆の行状をいさめ、彼らの仲もうまく行くようになつて、男子亀王丸が生まれた。



400年前の伊達政宗との戦いを慰めるかのように燃え盛る松明あかし



戦国女将大乗院と岩瀬御台を熱演した「宝井琴桜大講談会」。10月14日、市中央公民館

孫の出生を喜んだのもつかの間、盛隆は、天正十二年（一五八四）十月六日、三十三歳で寵臣の大庭三左衛門に斬殺された。これは、大庭が寵愛の衰えを恨んでの犯行といわれている。

二年後、大乗院には不幸が重なり、かわいがっていた孫の亀王丸が痲瘡にかかり、わずか三歳で命を落とした。このとき、芦名家では相続争いが起き、伊達政宗は弟の小次郎を入れようとした。政宗に反発

して二陸堂、芦名、佐竹連合ができた。それは、政宗が仙道筋の一族に妥協のない戦いを挑んでいたからであった。

## 二階堂家四百年の幕を閉じる

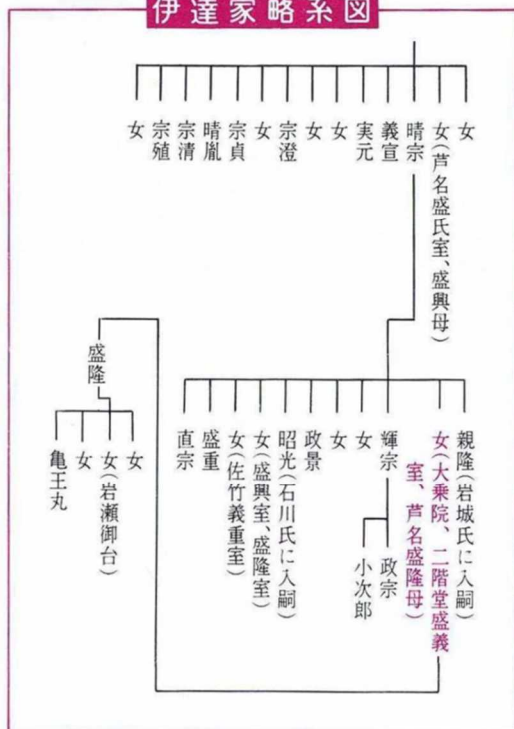
政宗は、天正十七年六月五日、芦名義広を磐梯山麓摺上原に破り、黒川城に入城した。

六月十一日、豊臣秀吉は上杉景勝、佐竹義重に政宗討伐を命じた。政宗は九月、家臣の上郡山仲為を使者として、

秀吉に芦名討伐の弁明をした。その翌月の十月、須賀川城

攻略にかかった。そのとき、須賀川城内には、政宗に内応していた二階堂家の重臣がいたことを裏付ける政宗の書状が、近年発見された。その書状には、城内状況を知らせ、政宗の出馬を促した書状にこたえて、政宗が承知したとの礼状である。日付は十月二十一日亥刻（午後十時ごろ）、あて名は「南左近大輔」となっている。この人物は、「保土原左近行藤入道江南斎」ではないかと思われる。ちなみに保

### 伊達家略系図



土原氏は、落城後仙台に移り、伊達家一家となった。

このような状況のもとで、政宗は十月二十日、黒川城を出発、二十一日、安積郡片平城に到着、前記の書状はここで書かれたという。二十五日から須賀川攻めを開始、同時に和議の申し入れをしたが、大乗院は聞き入れることなく、二十七日、落城に追い込まれた。

### 佐竹家に身を

### 寄せた後須賀川に

落城後、政宗は新しい館を建て、大乗院を迎えたい旨を示したが、彼女は、それを振



大乗院のお墓(長祿寺にある)

り切り、実兄の岩城親隆（平）を頼り、のちに妹の嫁ぎ先、佐竹家（水戸）に身を寄せた。慶長七年（一六〇三）、佐竹家は秋田に国替えが決まり、彼女もその移封の旅に同行するが、病の身で旅を断念。思いの地、須賀川にとどまり、六月十四日、乳母高橋菊阿弥の草庵で六十年の生涯を終え、菩提寺の長祿寺に葬られた。

（永山祐三）



天寿をまっとうした牡丹を供養する「牡丹焚火」(11月19日)

# 須賀川の人物史

須賀川城代

須田美濃守盛秀と天仙丸

24

天正十七年(一五八九)十

月二十六日、須賀川城の最後

(午後五時)ごろであった。

伊達家治家記録に「本城が

落城した後までも任務を守り

戦死すること実に希代の事な

りと皆嘆美す」とある。ここ

に中世の須賀川、岩瀬地方を、

四百年に及び支配した二階堂

家は終わった。

この戦いは「大乘院と政宗」

との戦いであったが、二階堂

家臣団の戦いでもあった。

戦後、多くの家臣たちは、そ

れぞれに身の振りかたを決め、

水戸佐竹家、仙台伊達家に仕

官して須賀川を離れた。

この中で、二階堂家筆頭家

老であった須田美濃守盛秀は、

和田に居城して東部を支配し

ていた。

盛秀は二階堂盛義亡き後、

須賀川城代を勤め、政宗の須

賀川攻めるとき、政宗からの

和順の申し入れを受け入れる

よう大乘院に建言したが、容

れられなかった。

## 磔にされた

### 初陣の天仙丸

盛秀は東部衆を引き連れ、  
大乘院、矢田野安房守、遠藤

雅楽頭、水戸・佐竹家、岩城・  
岩城家からの援軍と共に城に  
籠り、伊達勢と戦った。

このとき、盛秀の長男、源

一郎広秀(天仙丸)は十六歳で

初陣。華やかな稚児鎧を身に

つけ、飾りたてた馬に乗り、戦

場を駆けていたときに、崩れて

きた塀に押し倒されたところ

を伊達勢に取り押さえられた。

政宗は戦いが終わって三日

後、逆らった者への見せしめ

として、天仙丸を山寺山王山の

谷あい立てた磔柱に縛りつ

け、駆り集めた群集の前で高

榎敷から百玉の鉄砲で打ち

殺した、と藤葉業哀記にある。

遺骸は下宿・奥州道わきに埋

められ、稚児ケ塚といわれた。

また処刑の場所には農民の手

によって土手が築かれ、用水池

となり、稚児ケ池と名付けら

## 盛秀は 須賀川衆を預かる

したが、いつのころからか「築  
後塚」「築後池」と替えられて  
今に伝えられている。  
盛秀は落城後、矢田野秀行  
と共に水戸・佐竹家を頼り仕  
えた。佐竹義宣は盛秀に茂木  
(栃木県)一万石の城主とし  
て、その支配を命じた。

会津には「木の根明く」と  
いう春の季語がある。春にな  
って木の根の周囲の雪が解け  
て穴があいたようになること  
である。会津の俳人が誇らし気  
に説明してくれる会津だけの  
季語である。いわゆる一流の出  
版社が出している俳句歳時記

には、この「木の根明く」は  
当然のように載っていない。  
俳句歳時記に載っていないな  
くとも、会津の俳人は春の  
季語として俳句を作ってい  
る。私はそれでいいと思う。  
その土地の風土が、昔から  
慣れ親しんできた言葉(季

慶長七年、佐竹家は水戸か  
ら久保田(秋田市)に国替え  
となり、石高も八十万石から  
二十万石に減った、これは関  
ヶ原の戦いで豊臣家に加勢し  
たためであった。佐竹家と行



松明あかしの武者行列で勝ちどきをあげる二階堂侍

動を共にした盛秀は、のちに横手に移り、横手城代を勤めた。秋田に移った二階堂家の家臣団を盛秀が預かり、「横手大番衆」「横手須賀川衆」として今日に続いている。

また盛秀は、長男広秀（天仙丸）の冥福を祈るため、城下に金剛山天仙寺を建立した。この山号、寺号は、須田家の菩提寺であった和田の金剛院と広秀の法名天仙清公大禪定門からつけられた。天仙寺は岩瀬御台と横手須賀川衆の菩提寺でもある。天仙寺と金剛院はともに長祿寺の末寺である。

盛秀は城主として武将として戦国の世を生き抜き、寛永二年（一六二五）八月三十日、九十三歳の生涯を終えた。

（永山祐三）



## 江戸時代後期から ガラス製造へ

人間は昔から、光を通して輝く物に魅せられていたようである。

奈良時代になると、外国との交易も行われるようになり、ローマや中近東で作られたガラス製品もシルクロードを通じて舶載された。しかし、これらガラス製品は限られた階級の人々の所持品であった。ガラスが輸入されて約千年の間、日本ではガラス製造は行われることなく舶来品が

珍重されていたのである。

江戸時代後期から末期にかけて先見の明があった藩主たちはガラス製造に着目した。江戸期のガラスとして一般に知られているものに長崎ガラス、薩摩切子、江戸切子などがあるが、他の藩で作られたガラスは、前記の有名ブランドの陰に隠れて、あまり知ら

# 須賀川の人物史

須賀川ガラス創始者

安藤辰三郎

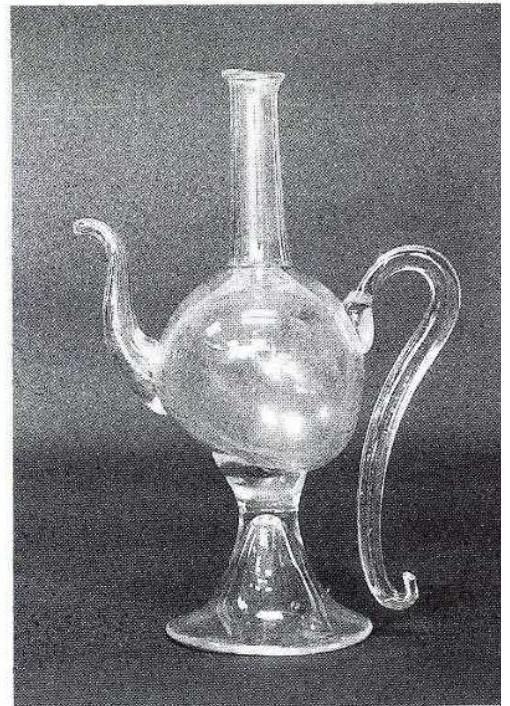
れることがなかった。

ガラス製造が行われた。

## 松平白河藩主の 産業振興策

この時期、須賀川でも白河藩主松平定信（一七五八〜一八二九）の地域産業振興策で

ガラス製造が行われた。定信は、寛政年間（年数不明）、郷士安藤辰三郎にガラス製造を命じ、長崎からピロイドロ工人相谷氷壺を招請して製造を開始した。定信も寛政十二年（一八〇〇）八月、飯坂温泉行の日記の中に「今日は須賀川へゆきて（中略）玉



水差し。創業のころのものと思われる。比重三・九四、鉛の含有量は五〇％に近い

員土屋良雄氏によって学術調査が行われ、初期の製品と思われるものは比重が三・九を示し、鉛の含有量は五〇％に近く、淡黄色を帯びた不純物や気泡の少ない、光沢のある良質の鉛ガラスである。

やや時代の経ったものは、比重が二・四を示し、色も薄い淡黄色で鉛の含有量も少なくなっている。

板製するを見」とあり、藩としても援助していたと思われる。ガラス工場は安藤家の屋敷内（現加治町）に建てて明治十年代まで約九十年間位製造していたようである。

## 不純物や気泡の 少ない淡黄色製品

須賀川ガラスとして現在確認されているものは、十点足らずであるが、これらガラス製品はサントリー美術館学芸

製品はいろいろの形のものを作られた。水差し、脚付杯、風鈴、小鉢、茶碗などが現存している。また古文書の中には、クナシリ、エトロフなどの探検家、近藤重蔵からの書状に「玉盤大二枚、小四十枚、硝子燈籠、硝子瓶」などがある。水戸藩の画家立原杏所からは硝子印。仙台瑞鳳寺十五世南山古梁禅師からは、硝子馨子のことを記した書簡が伝えられている。また、明治九年に明治天皇東北御巡行の日記にも「ガラス燈籠二本出来度旨、区长ヨリ談有之直二手配」とある。

## 先祖は

### 二階堂家の家臣

辰三郎は、二階堂家の家臣であった安藤十郎太夫を先祖にもち、代々町役人を勤め、八代重憲の長男として生まれた（生年月日は不明）。彼も郷士として町役人を勤め、文化元年には第二敷教舎訓導掛となった。年代が前後するが寛政六年（一七九四）、松平

定信が領内巡視のため須賀川に来て休憩したとき、田善の「江戸芝愛宕山図」屏風を目にとめたのも辰三郎の家であった。ここから亜欧堂田善が生まれたといっても過言ではないだろう。彼もまた舊臺きゅうたいと号し、石井雨考と兵に俳句を作り、青蔭集などにも入集している。このように産業、文化、教育と各方面に尽力して文政十一年（一八二八）九月一日没し、長祿寺に葬むられた。

（永山祐三）

## 写実的作品と 意欲的に発表

明治四十二年(一九〇九)、  
二十二歳の水野仙子(本名服部テイ)は、文章世界に推薦  
で小説「徒勞」を発表し、将  
来を囑望されて文壇の人とな

つた。  
四月に上京。自然主義作家  
として活躍していた田山花袋  
の内弟子となって執筆生活に  
入る。「写実的作品で人生観照  
の高い境地を示した作品」を  
次々と発表。作家としての地  
位を築きあげていたが、大正  
五年、二十九歳のとき、肋膜  
炎にかかり、その後、腎臓炎、  
腹膜炎を併発、闘病生活を送  
りながら執筆活動を続けてい  
たが、「酔ひたる商人」を絶筆  
として、大正八年(一九一九)  
五月三十一日、脳膜炎を併発  
し、姉の服部ケサ(広報六十  
三年三月号人物史)に看取ら  
れながら、群馬県草津温泉「聖  
バルナバ医院」で、この世を  
去った。三十一歳であった。

# 須賀川の人物史

自然主義を代表する女流作家

水野仙子

(一八八八—一九一九)

(26)



水野仙子

## 夫川浪道三が 仙子集を発売

この間、仙子の作品は数多  
くの文芸誌に発表されたが、  
単行本としての発行はなかつ  
たので、夫の川浪道三(歌人、  
作家)は、彼女の作品の中か  
ら二十二編を選び、妻へのほ  
なむけとして「水野仙子集」  
を刊行した。

## 近代洋画の巨匠 岸田劉生が装丁

道三は、刊行にあたり、序  
文を師の田山花袋に、装丁を  
近代洋画の巨匠、岸田劉生に  
依頼した。劉生の日記の中に  
仙子集のことについて、次の  
ように記してある。

大正九年三月二十三日(火)

晴

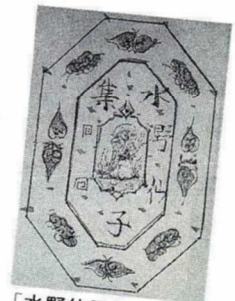
川浪道三会場に來り故水野  
仙子集装幀をたのむ。故人に  
は好意あり快く承知す(註  
新橋流逸荘、劉生個展会場)

五月一日(土)雨

約束の水野仙子集の表紙か  
く。古い渋い単純な黒と赤の  
味でうまく行く。先日表慶館  
で見た素描単彩の味を参考に  
した。(註醍醐寺宝物展)

五月八日(土)晴後雨

伊上凡骨が水野仙子集その



「水野仙子集」

水野仙子(本名・服部テイ) 小説家。兄の躬治は歌人、姉のケサはライ患者に一生を捧げた女医として有名。

他の表紙刷見本持つて来る。色は少しいけなすが皆よく出来てゐる。

とある。このようなことから察すると、劉生と仙子は、芸術上の交流で互いに作品を見つめ合い、劉生も仙子の作品を本物と認めていたから、装丁を快く引き受けたものと思われる。(表紙絵はカット参照、裏表紙には「水仙」の花が描かれている)

## 田山花袋が序文を寄せた

また、師の田山花袋は「お貞さんの集の前に」と題して序文を寄せている。

その中に「お貞さんの生まれた須賀川といふところは、昔からあたりにきこえた商人町で、郡山や白河や、二本松に比べて、何方かと言へば、士魂商才のその商才の方に属する気分の漲った町であった。従つて、お貞さんには、士族の娘といふところはなかつた。何うしても堅い田舎の商家の娘であつた。それに、何処をさがしても浮華なところ、軽薄なところがなかつた。全身すべて是れ誠とふやうな人であつた」と、仙子と当時の須賀川人の気概などを述べている。

水野仙子は、本名服部テイといひ、明治二十一年(一八八八)十二月三日、東四丁目四番地(現本町)の商家ランブ釜屋、服部直太郎の三女として生まれた。

十八歳のとき、須賀川裁縫専修学校卒業。その後、裁縫塾に通う傍ら、文学についての研さんを積み、女子文壇、文章世界などに投稿、雅号を水野仙子とした。

## 女流文芸雑誌「青鞥」にも参加

二十二歳のとき、彼女は、前述の「徒勞」の発表によつて上京。田山花袋の門人となつて文筆活動に入った。その後、「お波」娘」などで作家的地位を築いた。

明治四十四年、伸びやかな

自我の主張と拡充を旗印にした女流文芸雑誌「青鞥」に参加。この年、札幌出身の作家川浪道三と結婚したが、半年後、夫道三は肋膜炎にかかつた。新婚時代の作品からは、彼女の身の上をうかがうことができるものもある。

大正四年九月、読売新聞記者となるが、五年五月、彼女も肋膜炎を発病。養療生活を続けたが、運命をどうすることもできなかつた。

没後、夫の道三は遺骨を分骨し、東京稚司ヶ谷墓地と、仙子の実家服部家の菩提寺、池上町の十念寺に葬つた。墓碑には「川浪道三妻貞子之墓」と刻まれている。

(永山祐三)

# 墨こんあざやかな

## 気品のある筆さばき

今から八百年前の平安時代、王朝文化の栄華を道の奥の地に伝える平泉中尊寺金色堂。

その参道に建てられている標柱の文字は、碑面に空間を余すところなく金色堂にふさわしい人を引き付ける筆致である。

この標柱は、加治町妙林寺の住職であった張堂寂俊（号龍禪子、大龍）が大正十二年（一九二二）、東北地方巡錫のとき、中尊寺から請われて揮毫したという。現在の標柱は

石製であるが、元の標柱は木製で墨こんあざやかな上に気品をただよわせていた。

昭和四十三年五月、金色堂

は昭和の大修理が完成し創建時の荘厳さを再現した。このとき標柱の建替えが計画され、当時の中尊寺貫首、今春聴（ペンネーム、東光）師は、龍禪子の墨跡を惜しみ石柱に再刻する決定をしたといわれる。

龍禪子の墨跡は、金色堂とともに、後世に伝えられるものと思われる。碑の裏面に「須賀川市妙林寺六十八世張堂寂俊師揮毫」と刻まれている。

また、四十数年の間、風雪に耐えていた標柱は、関係有志

の骨折りと中尊寺の好意によつて、自坊の妙林寺に里帰りし、境内の弁天堂に保管されている。

## 「筆禅一致」を提唱

### 門弟1万人

寂俊は、明治九年（一八七六）三月八日、伊達郡飯野村大字飯野字町七十八番地張堂慶山の長男として生まれた。

張堂家は、東聖山五大院という本山派修験聖護院に属する中世から続いた家柄である。彼は、幼名を俊鷹（とよたか）とい

い、書の上手な子供として評判で



角田磐谷画「大龍像」

坂寂栄のもとで得度した。その後、天台宗中学校から天台宗大学東京支校に入学。僧侶としての勉学を修め、三十一年九月、二十三歳で妙林寺六十八世の住職となった。さらに研鑽を積むため、天台宗の本山比叡山に登り、「顕密禅戒」の奥義を会得したが、禅について

は京都妙心寺（臨済宗）南天坊中原鄧洲禅師について七年間修業して許可を得た。また、彼の本命である書道の師は以前から慕っていた、入木道正統勅賜筆道本源四十五世横井北泉である。北泉が岐阜の誓願寺に立ち寄ったとき

に駆けつけ、入木道に入門を許された。

三十二歳の十二月三十一日、入木道の秘中の秘とされてい

る「鎮火水龍」などの奥義を伝えられ、入木道第四十六世を継承した。このときから龍

禅子と号して全国を巡錫しながら研鑽を積み、「筆禅一致」の書法を提唱した。その門弟は一人とも言われている。

## 書のほかにも

### 自画賛の達磨なども

作品も全国各地に数多く残されている。作品には時期によつて次のように「号」が款記されている。初期（十八〜三十一歳）蓮舟・露月・碧崖。

入木道継承後（三十二〜四十九歳）龍禪子。五十歳以後は大龍として、書のほか自画賛の観音像、四君子、竹、蘭、菜根、龍、達磨などがある。

特に達磨は東京在住時、愛読閣で描いた百回百態がある。この作品は新宿三越で展覧され、須賀川にも数点伝えられている。

# 須賀川の人物史

## 入木道第四十六世を継承

### 張堂大龍

(一八七六〜一九四七)

27

あったという。十歳のとき、一日掛りで観音像を描き、母に見せたところ、母は画像に手を合わせ、彼の大成を願ったと伝えられている。

十六歳のとき、仏門に入り、川俣町、天台宗大円寺住職西





大平12年に、大龍が揮毫した平泉中尊寺金色堂の標柱

## ざだいふ 太宰府観世音寺の 寺号碑も揮毫ごう

市内妙見山須賀神社わきに自然石の大碑があり、「靈光」と刻まれている。この書を揮毫したときには、筆の先から光が発したといわれている。

また「都府楼はわずかに瓦の色を看、観世音寺はただ鐘声を聴く」菅原道真の詩で有名な九州太宰府観世音寺の寺号碑も彼の揮毫である。ちなみに、彼の妻リヤウは福岡市の出身である。

このように各地に墨跡を残した大龍は、東京の空襲も激しくなった昭和二十年三月、

疎開準備をしていた貨車三両分の三十余年間の作品、提唱の原稿や荷物などを全部焼き尽くし、体だけの帰山となった。帰山後も筆を持ち続けたが、戦災で受けた精神的疲労から、昭和二十二年（一九四七）十月二十日、東九丁目（上北町）の寓居で七十一歳の生涯を閉じた。（永山祐三）

# 須賀川の人物史

関下人形座育での親

豊竹姫太夫

(?~1818)

28



昭和53年県の重要民俗文化財に指定。人形の一部は、市立博物館に展示されています

## 江戸から大正時代に かけて150年続く

江戸時代、安永年間(一七七〇)から大正時代(一九三〇)までの約百五十年間、市内関下では、操人形結城座を組織して近郷の祭礼や農閑期の娯楽として、ほかの村を興業して回り、人々から「関人形」と呼ばれて親しまれていた。が、大正十二、三年ころの西袋村山寺山王様(日枝神社)の秋祭りでの上演を最後に、一座の幕を降ろしたといわれている。

それから四十年後の昭和三十九年二月、関下地藏堂境内の郷倉(備荒米倉庫)と、最後まで人形芝居の座長として、区の人たちを指導していた根本伴右エ門の孫、正忠家の土蔵から、数多くの操人形と関

係資料が発見された。

これらの資料は、早稲田大学教授杉野橋太郎、人形芝居の研究者永田衛吉、洋画家で首の研究者斎藤清二郎先生らの長年にわたる調査の結果、関下人形は質、量ともに全国屈指の資料であることが明らかになった。

なぜ関下に人形芝居が定着したのであるだろうか?。江戸時代の関下は、長沼藩領三万石のうち、仁井田村二千七百八十四石余り(天保郷帳)の、金喰川(滑川)の河岸段丘に開けた小さな集落であった。地名は金喰川の「堰」に由来する。

## ドサ回り一座の興業が 庶民の楽しみ

江戸時代の地方の町には、常設の芝居小屋(劇場)などではなく、一年に一回か二回、巡業でやってくるドサ回りの一座を楽しみに待っていた。この一座も天候などに支配されることが多く、観客が不振に終わったとき、帰りの費用をねん出するため、最後の

興業地で人形一式を抵当に、金を工面したといわれている。関下に人形芝居が移入されたのも、このようなことからであったろうといわれている。

## 姫太夫は人形の 指導で関下に

関下に最初に入った人形類は、古浄瑠璃(一人遣人形)から近松門左衛門の新しい浄瑠璃(三人遣人形)に移行した過度期の江戸系(東京)の古型首であった。その後、文化・文政年間に大阪系(文楽系)の人形類が導入された。この人形類と一緒に、豊竹姫太夫が指導のために来たという。

豊竹姫太夫(豊竹は義太夫節の太夫の家名)は、大阪道頓堀にあった豊竹座(人形芝居)の一門で、義太夫語り(浄瑠璃)であったという。地方巡業で関下を訪れ、関下的一座の人々に大阪系の新しいカラクリの操作方法や浄瑠璃を指導。部落の人たちとも親しくなり、彼は地藏堂を仮住ま

いして居残り、人形芝居の普及に心血を注ぎ、生まれ故郷に帰ることなく、関下の土に骨をうずめた。

「清山浄心庵主

丹波国出生 豊竹姫太夫

文政十一年五月二十二日

と、刻まれた卵塔型の石塔

が、地藏堂裏の墓地に建てられた。

## 総勢20人で

## 人形座を組織

姫太夫亡きあと、一座の維

持と振興には、村を挙げて協力したことが、記録によって

など総員二十人ぐらいの構成であった。

知ることが出来る。また、世

座長として運営に当たって

話人も、大世話、中世話、若

いた人々に、農業の傍ら染屋

者連と組織化されて、経済的

をしていた根本彦三郎（芸名

にも地方の人形座としては形

吉田幸三郎、一八四七〜一九

態の整った一座で、浄瑠璃、

一九）根本伴右エ門（芸名吉

三味線、人形遣、はやし連中

田冠三、一八三八〜一九二一）

根本寅蔵（芸名吉川虎吉、一八七二〜一九三五）などがある。

## 二本松や大信村まで

## 巡業に出かける

外題帳や興行収入帳から興

行地の一部を記してみると、

前田川、石川町、舟津、大里、

長沼町、岳下村（現二本松市）、

大屋村（現大信村）などとな

っている。明治四十年ころの

一人当たりの日当は、三十銭

から六十銭ぐらいであった。

## 山寺山王様の祭り

## 幕を閉じる

大正期に入って新しい時代の

の流れは、急速に東北の地にも

も押しよせた。関下人形結城

座は、約百五十年間、県内各

地を興行し、土地の人々に、

人情と娯楽で接してきたが、

一座の老齢化や後継者の問題、

そして、新しい時代の流れに

は勝てず、前記の山寺山王様

の祭りを最後に一座の幕を降

（永山祐三）



# 本名は角田源寿 石川町に生まれる

昭和三十年代の国指定名勝「須賀川の牡丹園」のポスターに、大輪の牡丹の花を的確な描線と華麗な色彩で描き、人々の目を引き付けていた作品があった。この作者は、写

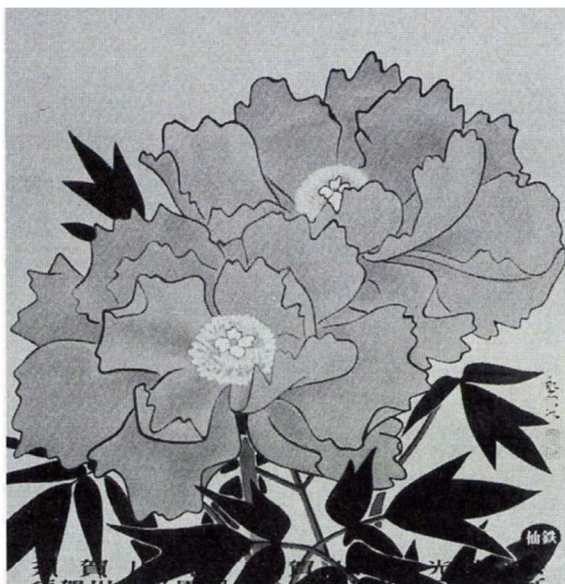
生を本位としての花鳥画を描き、牡丹に魅了され、晩年は牡丹園に近い、和田字柏崎（通称二ツ池）にアトリエを建て、数多くの牡丹を描き、「牡丹の磐谷」といわれ、牡丹園の名勝指定に尽力した日本画家角田磐谷である。  
磐谷は、本名を源寿といい、明治二十二年（一八八九）五月五日、石川郡中谷村（現石

## 須賀川の人物史

牡丹に魅せられた画家

角田磐谷（一八八九〜一九七〇）

29



磐谷が描いた牡丹園ポスター

昭和30年代に4点の作品がポスターになった。全国の駅などに掲示され、評判を呼んだ。



60歳のころの角田磐谷

川町）大字谷沢字北ノ前七十六番地、角田豊之助の二男として生まれた。  
彼は、子供のころから絵を描くことが好きで、石川町尋常高等小学校を卒業と同時に福島市の画家長尾月仙の内弟子となった。が、画家としての勉強は、中央画壇のなかでなければならぬと志を立てて上京。日本画の大師所高森の門を叩いた。二十歳のとき、所は寺崎廣業の天籟（てんせい）画塾への入門をすすめた。

廣業のもとで三年間修業を積み、「王摩結」を天籟画塾展に出品して初めて世に問うた。この時期の作品には廣業の影響が強く出ているといわれている。

### 昭和24年

#### 日展委員に推薦

大正九年二月、廣業が没し、彼は、その後、師を求めるとなく制作に励み、郷里石川の山中を題材にした「春の若木」が帝展に初入選。その後、帝展五回、文展二回に入選した。この間、何回か特選候補に上がったが、師匠につかない一匹狼であったため、選ば

れることがなかったといわれている。しかし、昭和二十四年、彼の業績が認められ、日展委員に推薦された。

### 福陽美術会の 第3代幹事長

昭和十六年から十七年の戦時下、磐谷は陸軍省嘱託・従軍画家として、関東軍に派遣され、満州（現中国）各地を写生して、陸軍省に「ソ満国境図」などを納めた。

帰国後、この絵と同じ図柄の「ソ満国境図」を福陽会第十四回美術展に出品した。

福陽美術会は、大正八年四月八日、福島県出身の在京日本画家で結成した組織で、幹部には勝田蕉琴（会長）、荻生天泉（幹事長）、酒井三良、角田磐谷、坂内青嵐などがいた。磐谷は青嵐のあと三代目の幹事長を務めた。須賀川出身の会員は、須田善二（瑛中）と渡辺武久（太子庵）がいた。

現在この会は、大山忠作（二本松市出身）が代表幹事となって運営にあたっている。

## 隣家から出火で すべての作品を焼失

昭和九年九月三日、磐谷は大きな災難に見舞われた。それは、結婚してから十八年間住んでいた、駒込林町の自宅が、隣家の失火で類焼し、画家としての財産である貴重なスケッチブックや各種の展覧会に出品した作品がことごとく失われた。

## 「屋後展望」が 第15回帝展に入選

この年、不幸にめぐらず、第十五回帝展出品の制作に励み、軍鶏を題材にした「屋後展望」



「屋後展望」(182cm×193cm、昭和9年制作)

が入選した。「屋後展望」は現在、福島県立美術館に収蔵されている。

同館には、磐谷が県内の名所旧跡などを描いた二十三点の作品がある。

## 和田字柏崎に アトリ工を建てる

二十年三月、東京の空襲も激しくなり、彼は家族とともに石川町に疎開した。終戦後の復興が始まり、世の中に活気が見られるようになった二十五年五月、牡丹園に近い浜田村和田字後町に移り、牡丹

の写生に没頭した。その後、三十一年一月、和田字柏崎に居を構え、制作の傍ら、県内の日本画家たちを指導した。

## 昭和39年県文化 功労賞を受ける

磐谷は、二十九年十一月三

日、画家としての業績と美術界に尽くした功績により、福島県文化功労賞を受賞した。

受賞を記念して「画業五十年回顧自選展」を福島市中合デパートで開催。格調の高さと筆致は観覧者を驚かしたという。その後も絵筆を持ち続けたが、四十五年(一九七〇)四月七日、和田字柏崎四十番地の自宅で八十一歳の生涯を閉じた。

磐谷の作品の代表作といわれる、帝展、文展の出品画の多くは、政府買い上げとなり、各省庁に保管、展示されていた。が、戦火と自宅の火災で失われ、現在は、画集や写真でしか見ることができない。市の施設では市立博物館と芭蕉記念館に展示してある。

(永山祐三)

24歳で

## 須賀川の生産方に

市役所正門の左側に根回り約三層七十センチのアカシアの老木がある。ここに小学校があったころは、夏の暑い日に、児童や近所の人が木陰で涼をとっていた。

このアカシアは明治時代初

# 須賀川の人物史

③〇

近代須賀川の礎を築いた

## 橋本傳右エ門

(一八四五—一九〇三)



市役所正面入口左側の針槐(はりえんじゅ)の木

期、生産方として須賀川の発展に尽くした橋本傳右エ門が植えたものである。彼の覚え書「老のくり言」(アカシア樹ノ繁殖)の中で、「当町学校へ献木セリ」とある。生産方とは、明治二年(一八六九)、明治政府の新政策として打ち出した勸業行政の組織で、資金として太政官紙幣(金札)が貸し付けられた。

須賀川が生産方は、守山藩

取締役所の管轄にあって、次の六人が元締(役員)として任命された。竹内庄三郎(四十歳)、橋本彦作(傳右エ門二十四歳)、石井勝右衛門(三十三歳)、柳沼新兵衛(四十五歳)、塩田治助(四十歳)、柳沼大助(年齢不明)。傳右エ門は二十四歳の一番年下であった。



からは、一般行政事務まで担当させられ、許認可事務まで取り扱った。事務所は、中町旧白河藩陣屋(今の東邦銀行裏)跡に置かれた。三年八月に、生産方は廃止され、「生産会社(物産方)」と組織変えて役員は十一人となった。傳右エ門は弘化二年(一八四五)二月十一日、中町(今の中町三十三番地)十一屋、橋本傳五右エ門の長男として生まれた。

十一屋は中町から東町にかけて多くの家作を持ち、米穀や太物(綿、麻の太い糸の織物)を商っていたといわれている。彼は記録によると、明治二年までは名を彦作と称しており、三年から傳右エ門と改名したようである。

明治三年八月、生産会社設立、公選投票で頭取に市原朔助、頭取並(副)に柳沼嘉久右衛門、元締に橋本傳右エ門、柳沼新兵衛、柳沼大助、元締並に石井勝右衛門、塩田治右衛門、高久田金三郎、肝煎に道山三次郎、永田藤蔵、永田佐吉が選ばれた。翌四年の公選では傳右衛門が頭取並に選ばれた。

## 県立須賀川病院を

## 明治5年に設立

生産会社は、その年に役員の変更を行い、頭取に市原又次郎(二十六歳)、頭取並に傳右エ門(二十歳)が就任し、他の役員も年齢も二十四歳から四十二歳と若くなり、活発に動き出した。

五年二月、まず県立白川病院を須賀川に移転し、県立須賀川病院を設立した(今の公立岩瀬病院)。六年「商法会所」、七年「産馬会社」「製糸場」などを設置した。また農業に関しては、西洋農法の研究と導入、荒れ地の開拓を盛んにするよう奨励した。

## 緑町17ヘクを

## 舶来馬耕具で開墾

彼もまた、和田原(緑町)に十七町歩(畝)の荒野を購入し、外国から輸入した馬耕具で開墾した。ここに横浜から持ち帰ったフランス産馬鈴薯、五個を種芋として栽培

## 中町、十一屋の 長男として生まれる

民政局の出先機関になって

当時、須賀川の支配は、守山藩から「平・民政局」に移り、二年九月に「須賀川県」が設置されたが、十月に廃県となり、白河県の支配となった。

した。土地に適していたためか、多くの収穫があり、のち

に宮城、山形県南部まで普及したという。

冒頭のアカシアは、十年、東京から五本の苗木（一本二十五銭）を購入して植えたものであるが、この木は本当のアカシア（常緑高木）ではなく、針槐（ニセアカシア落葉高木）であった。これは薪炭材に適していたので導入したという。

## 田善の銅版画を 宮内省に献納

「老のくり言（骨董遊）」の中に「永年ノ事業ニ失敗シ老後楽ミニ書画骨董古瀬戸ヲ集ム（以下略）」とある。彼は、三十二年七月二十四日、収集品の中から亜欧堂田善の銅版

画四十四点、銅原版一点、木版一点の四十六点を宮内省に献納した。現在は東京国立博物館に収蔵されている。今年

四月二十一日から六月十日まで福島県立博物館で開催されている「亜欧堂田善とその系譜」展に彼が献納した中から六点の作品と、かつ所蔵していた油彩画「墨堤観桜図」写生帖、「天趣自得説」などが

展示されている。また市立博物館蔵の県重文「六郡絵図」も収集品の一つであった。

このように、産業、福祉、文化と各方面に足跡を残した傳右工門は晩年、岩間三十七番地（緑町）に移り、明治三十四年（一九〇一）九月十日、その生涯を終えた。五十六歳であった。

（永山祐三）